

## 《報告》

# 認知症看護教育研修報告 —当事者視点から考える認知症看護の目標作り演習を実施して—

大嶋 光子, 又吉 忍

相山女学園大学看護学部看護学科

## 要 旨

2011年9月12日、10月28日の2日間、A県看護協会主催の「認知症看護研修」を実施した。参加者は日本看護協会のジェネラリストのためのクリニカルラダーをもとにしたレベルⅡ、レベルⅢの看護師170名であった。1日6時間の研修は演習を中心に行われた。演習では医療者から当事者に視点を変えることで、認知症をもつ患者の訴えが理解できた。受講者は21のグループにわかれ、3つの演習技法を使い、それぞれの看護目標を作成した。研修を通し、人権の尊重、愛情をもって看護することの大切さを考えることができた。認知症看護の研修においては演習を中心に行うことで意欲が高まると考える。

キーワード：認知症, 当事, 演習技法

## I. はじめに

平成23年度A県看護協会主催で「認知症看護研修」が平成23年9月12日、10月28日の2日間、実施された。参加した看護師の多くは認知症をもつ患者の看護（以下ケア）に何らかの課題を抱えている。入院施設において認知症看護には三つの困難があると考えられる。①認知症をもつ患者は一般の患者とケアの質が異なり、特別の配慮や対応を必要とする。認知症をもつ患者は治療のための注意事項が守られなかったり、点滴やルートを自分で抜いてしまうなど、予期せぬ事柄が突然起こったりする。②BPSDに対する困難。BPSDは看護者側にもその原因があるといわれているが、多彩な症状のため看護者側にストレスや負担が増加する。例えば看護師や家族へのいわれのない暴言・暴力、病棟内の徘徊、他の患者のエリアへの立ち入りなど、看護師が対応に苦慮するだけでなく、認知症をもつ患者自身が心身の安静・安楽が守れない。③コミュニケーションの不全による困難。認知機能の障害によってコミュニケーションが円滑にはかれないため、患者の苦痛や希望、ニーズを理解することが難しい。このことで看護師は自身の知識不足、患者の苦痛を和らげられないことに悩み、ケアの意図を十分に理解してもらえないまま、意に反して処置を強行してしまうなど、もっと違うケアの方法があるのではないかとジレンマをもつのではないかと考える。

そこで、このたび「認知症看護研修」において演習を中心とした研修を企画した。医学的知識は十分に習得していると考ええる。よってこの研修は参加型で、実際に臨床現場で看護師が目ざす目標を自らが創造し、自身が看護に生かすための研修とした。まずは高齢社会の進行と認知症患者

者数などの情報共有を行い、チームワーク作りの演習を通して医療者視点から当事者視点の変換を図り、認知症看護について共通の目標を作成する取り組みについて、演習方法をここに報告する。

## Ⅱ. 受講者と研修プログラムの内容

### 1. 受講者の背景

研修受講者はA県内の病院に勤務する看護師170名。

受講者のレベルは日本看護協会の「ジェネラリストのためのクリニカルラダー」をもとに設定したレベルⅡ（看護実践の場面において単独で看護を提供できる。チームリーダー的役割や責務を認識し遂行できる。自己の学習課題に向けた学習活動が展開できる）、レベルⅢ（高度な看護活動を実践でき、かつ他者にモデルを示すことができる。自己の学習活動に積極的に取り組むのみならず、指導的役割を発揮できる）の者である。

### 2. 研修プログラム

本研修の目的は医療者視点から当事者視点に変換することによって、一人の人としての共通点に視点を移したケアを考え、実践に生かす基礎とする。研修時間は1日6時間で実施した（表1）。同じ内容を2回実施した。

### 3. 演習方法

グループで行う演習テーマ「あなたが認知症になったら、してほしいこと、してほしくないこと」である。

各グループはチームワーク作りで自己紹介、所属の紹介、個人の得意、不得意などの話題でアイスブレイクを行う。メンバーに共通する事柄からチームに名前をつける作業を5分間で行う。チームの中からリーダー1名、書記1名、発表者1名を選出する。

#### 1) ブレインストーミング（20分間）

ブレインストーミング（BS法）とは集団発想法で基本的には1グループ5～8人で行われる集団技法である。今回は1グループ8名、21グループで行った。ブレインストーミングは①批判厳禁、②自由奔放、③質より量、④結合改善の4つの基本的なルールがある。各個人で浮かんだ意見を付箋紙（カード）に書き込んでいく。

表1 認知症看護研修プログラム

時間	(分)	内容	形式
9:30～10:00	30	高齢社会と認知症の情報	講義
10:00～10:50	50	認知症の医学的理解	講義
11:00～11:20	20	チームワーク作り	演習・発表
11:20～12:30	70	認知症の心理的理解	講義・演習
13:30～14:30	60	グループによる理念づくり	演習
14:40～15:30	50	認知症看護の理念	発表
15:30～16:30	60	パーソン・センタード・ケア	講義

リーダーは時間配分を考慮しながら、ルールを守り、メンバーになるべくたくさんのカードを書くようにテンポよく進める。他のメンバーから出された意見に便乗することも歓迎する。

## 2) KJ法 (20分)

KJ法はブレインストーミングなどの発散技法によって得られた意見をまとめて、問題解決に結びつけていくための収束技法である。BS法によってだされたカードをグルーピングする。まとめたカードにそれらの内容をあらわす表札をつける。メンバーで十分話し合い、カードに書かれた内容が自分で書いた内容と違う受け取られ方をしている場合は自己主張をする。場合によってはどれにも属さないカードが出てくる可能性があるが、1枚であってもグループ化しておく（一匹狼カードと呼ぶ）。

## 3) セブクロス法 (20分)

KJ法によってできあがった表札とグループをおおまかに7つ前後にまとめ、机上に模造紙を用意し、左端から貼り付けていく。その際、左側のグループが一番重要なものであり、なおかつ、一番上のカードがそのグループを代表するものである。順次重要度の高いものから右側にいくほど低くなるように並べる。一番重要なものはカードの枚数に関係しない。1枚（一匹狼カード）の重要度が高くなる場合もある。

# Ⅲ. テーマは「あなたが認知症になったら、してほしいこと、してほしくないこと」の結果

看護師170名が21グループにわかれて、演習を行った。書かれたカード数は1700枚であった。各グループで表札の3位までを表にした（表2）。各グループが表札から目標を作成した（表3）。

表2 表札一覧表

グループNo.	1位	2位	3位	コード数 (1700)
1	家族	愛	食	81
2	あたたく関って	一人ぼっちにしないで	レクリエーション	70
3	ばかにしないで	ひとりにしないで	自由	82
4	人として接してほしい	美味しいものはたべさせてほしい	自分のやりたいことことをやりたい	28
5	支え	ハート	清潔	72
6	自分をしてほしい	人間らしく扱ってほしい	やさしくしてほしい	78
7	人権尊重	食へのこだわり	美	73
8	人格	優しさ	欲求	82
9	人間らしく	家族	排泄	85
10	愛	楽	温	87
11	家族	しばらないで	優しくしてね	42
12	人権尊重	人にやさしく	食は大切	95
13	安全	愛情	食事	103
14	人権	愛情を持って接する	食(口で食べたい)	99
15	痛いことは嫌	家族にいてほしい	怒らないでやさしく	98
16	尊	生	痛	98
17	円満な精神的ケア	生理的欲求の充実	良好な人間関係の構築	108
18	対応	自然な形で	愛情	78
19	一人はいや	おいしく食べて寝る	毎日お風呂	70
20	知識	尊厳	コミュニケーション	81
21	愛情	思いやり	心のつながり	90

表3 認知症看護の目標

グループNo.	タイトル表
1	愛情をもってひろいところで
2	5分でもその人によりそって
3	私たちは否定しません～安心した暮らしを～
4	自分らしくすごせるように援助する～やりたいようにやらせてよ～
5	ハートでコミュニケーション
6	その人らしく生きられるよう援助していく
7	その人らしさを大切にする
8	死ぬまであなたはあなた
9	尊厳を守り、その人らしく健やかに生活できる
10	食美排遊をたもち私たちは愛情を持って楽しく温かみのあるサポートをする
11	心にゆとりを持って看護を楽しもう
12	人権を尊重し、その人のニーズを満たす看護をする
13	人格を尊重し安全にその人らしく過ごすことができる
14	人として ～love&life～
15	人として尊厳をもって接しその人の心によりそった看護をする。
16	私を知って
17	人間らしく安全な環境を整える
18	患者の意向を尊重し愛情をもって対応する～その人らしい自然な形で～
19	その人らしさのままで生活できるように援助する
20	みんな幸せ
21	人権を尊重しつつ、愛情と思いやりをもって接する。～心のつながり～

#### IV. 今後に向けて

中堅どころのレベルⅡ、Ⅲの臨床の看護師は日常的に認知症をもつ患者に接し、疲労感を強く感じ、これでよいという手ごたえも少ないように見受けられた。演習では一見簡単な問いである「あなたが認知症になったらしてほしいこと、してほしくないこと」をカードに書いてもらった。そこに書かれているものは医療現場の一場面を垣間見る思いであった。看護師は当事者視点で考えた結果、自分たちが書いたものが「身体拘束」や「虐待」に近いことに気づいた受講生もいた。看護師は人権を侵害することや孤独を感じさせることをしたいと意図的に行っているのではなく、知らず知らずの間にしている。それに気づかないでケアを続けることがまた疲労感につながるのではないかと考える。認知症看護研修は頭と心と体を使い、演習を中心に行った。これらは演習技法の流れにのることで、いままで意識化されないことが他のメンバーの意見から出ることによって意識化される。個人では難しい収束もチーム力によって目標となる達成感も得られたと考える。今回の研修では多忙な業務を離れ、同じ悩みをもつ看護師同士が心の奥にしまい込んでいた看護師魂が解放され、何を言っても批判されない、こだわりもそれもよしとする環境のなかで声を大にして話し合いをしてもらった。研修後、「パーフェクトな認知症看護は体によくない」「明日からはちょっとは笑顔であいさつする」「自分でもこんな扱いは嫌だから、お年寄りはおさらですね」と感想が聞かれた。元気とやる気を取り戻した研修となったのではないかと考える。このような貴重な機会を与えてくださった看護協会と170名の看護師に感謝申しあげたい。

**Report on Dementia Nursing Education Training**  
**— Implementation of Exercises in Goal Creation of Dementia Nursing**  
**from the Patients' Perspective —**

Mitsuko OSHIMA, Shinobu MATAYOSHI

*Sugiyama Jogakuen University School of Nursing*

**Abstract**

“Dementia Nursing Training” sponsored by A Prefecture Nursing Association was held on September 12 and October 28, 2011. A total of 170 Level II and Level III nurses graded according to the generalist clinical hierarchy of the Japanese Nursing Association participated in the training. The training was conducted focusing on a number of different exercises for six hours per day. Through the exercises, the nurses were able to understand the distress of dementia patients by considering the situation from their perspective rather than that of medical staff. The participants were divided into 21 groups, each of which created a nursing goal by using three exercise techniques. Through the training, they were able to consider the respect for human rights and the importance of nursing with love. In dementia nursing training, the participant's enthusiasm is intensified through exercise participation.

**Keywords:** dementia, patient, exercise technique